東久留米市

くるめの文化財

平成５年３月
第９号
東久留米市教育委員会

今日私達は、平成５年あるいは1993年といった「元号」ないしは「西暦」年を一般的に使っています。ところが元号や西暦よりもずっと長い間日本で使われていた「年月」の表現法が他にあります。去年は「さる」だったから今年は「とり」だといった呼び方「えと」です。ちなみに、甲子園球場は甲子の年に造られたことに因んで名付けられたものです。

今回は、今日の日常生活にはあまり縁がなくなってしまったとはいえ、かつての日本の生活文化に密接に結び付いていた、その「えと」を取り上げてみました。

干　　支

＜「干支」と「え・と」について＞

「えと」とは、十干・十二支のことで、漢字では「干支」と書きます。

「干支」は、もと中国で年代の計算などに設定された十干と十二支との組み合わせに始まった「干支＝かんし」の俗称です。干支（えと）の「干」は十干の「干」、「支」は十二支の「支」の文字に当たります。

「十干」というのは、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の総称のことです。一方、十二支は暦法で、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の総称のことです。

この十干と十二支は、ともに古代中国の殷代に起こり、漢の頃から両者を組み合わせて紀年法として用いられるようになったようです。ちなみに、“六十才で還暦を迎えました”といいます。それは、十干と十二支、つまり十と十二を組み合わせると六十通りの組み合わせができ、それを一単位とすると六十で一巡することになります。次から再び最初にもどると、つまりは「還暦」となる、というところに起因しているのです。

そうした十干・十二支が「えと」といわれるようになったのは、６～７世紀頃に日本に伝わって「陰陽道」の思想と結び付き、その中でいう「兄（え）」・「弟（と）」から転じて俗称で「えと」と呼ばれるようになったと考えられています。

＜「干支」と「えと」と「陰陽道」＞

「陰陽道」というのは、古代中国に発生した「陰陽五行説」に基づく天文・暦数などに関する学問（哲学・易学）で、それはやがて干支と関連付けられるとともに占術に利用されるようになり、四季の巡りや方位などをもとに国家・社会、あるいは人の行為・行動についての吉事・凶事などを占う方法として体系づけられるようになります。この「陰陽道」の読みは“オンヨウドウ”または“オンミョウドウ”とよみます。

「陰陽」というのは、日・春・南・昼・男・兄などは「陽」、月・秋・北・夜・女・弟などは「陰」といったように、中国の易学でいうところの相反する性質をもつものを陰・陽の二つに分けてとらえた表現法です。そして陰陽道は、万物はすべて陰・陽二種類の気の消長によって成り立っているとする考えを基本としています。

「五行（思想）」とは古代中国の哲学（思想）で、すべてのものをつくりあげている元素を木・火・土・金・水という五つで表し、宇宙間のものはすべてその五行の変化によって生ずると

説く考え方です。そして、陰陽道と共に陰陽五行説として互いに結び付き、木・火は「陽」、金・水は「陰」、土は中間とし、これらの変化によって自然界の災難異変・人間界の吉凶等を説明しようとする「占術」として利用されるようになったのです。それが、紀年や数、方位などを表す干支と結び付いたのは必然的なこととともいえるでしょう。

さて、十干を五行、つまり木（き）・火（ひ）・土（つち）・金（か）・水（みず）に配当し、更に二つに分けて陽をあらわす兄（え）、陰をあらわす弟（と）を交互に割り当てて「の」でつないで読むと、甲（きの**え**）・乙（きの**と**）・丙（ひの**え**）・丁（ひの**と**）・戊（つちの**え**）・己（つちの**と**）・庚（かの**え**）・辛（かの**と**）・壬（みずの**え**）・癸（みずの**と**）ということになります。「えと」の語がこの兄（え）・弟（と）から生じたといわれているのはこのためです。

この占術的性格を強くもった陰陽道は、「暦（こよみ）」と深い関わりをもち、また、古代中国の哲理と一体化していることから、先進の知識として古代日本の律令管制の下で宮廷・公家に受け入れられて浸透していき、政治、儀式、生活などに強い影響を与えるようになります。それは平安時代以降になるとますます呪術的となり、やがて中世以降になると次第に民間の呪術にも及び、日取り・方位・星回り・相性・生年干支などありとあらゆる物事に対して種々の俗信をもたらし、人々の生活に強い影響を与えるまでになるのです。

＜「十二支」と「十二」＞

十二支の十二は月を基本とした暦法から生じたものと考えられます。

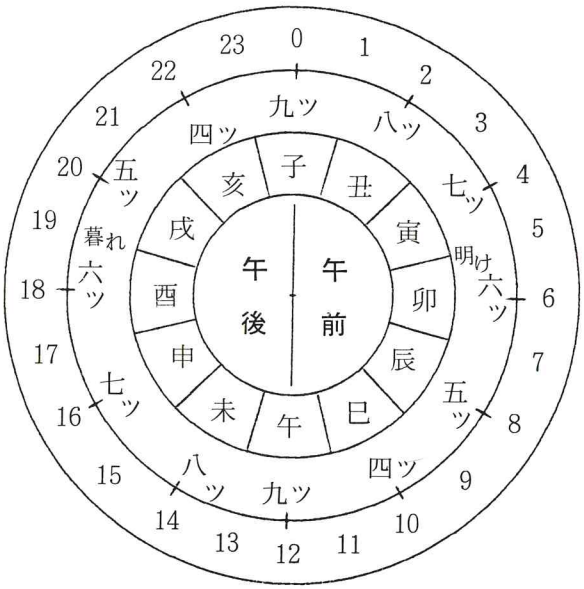
月の新月から新月、または満月から満月まで（月齢）を数えると、平均29日12時44分といわれます。この月齢を基本とした大陰月（たいいんげつ）は、古代暦法では29、5 太陽日とされています。つまり、大陰月を12回繰り返す時間（大陰年／大陰太陽暦）が太陽暦のほぼ１年に相当します（この大陰太陽暦では太陽年より１年が11日短いため３年程度ごとに「閏月」１ケ月を入れて１年を13ケ月とする）。こうした12という数は、十二支をはじめ昔から様々なものに当てられています。ちなみに、この１年＝12ケ月に呼び名を当てたものが「十二月建（げつけん）」といわれるものです。同じ十二支ですが、この場合は子からではなく、五行の配列の関係から寅を１月に当て、寅（正月）、卯（２月）、辰（３月）、巳（４月）、午（５月）、未（６月）、申（７月）、酉（８月）、戌（９月）、亥（10月）、子（11月）、牛（12月）となります。

また、十二支は方角や時刻を表すのにも用いられています。

時刻は１日を十二分し、それを十二支に配合して呼称します。基本は夜中の12時で、２時間ごとに子・丑・寅……と当てていきます（図参照）。

後に、この時刻を知らせるために鐘を鳴らしたため、その数によって「九ツ」・「八ツ」……などの俗称も生じます。落語で有名な「時そば」でいう“九つ”というのは、この鐘の数によって時刻を判断する俗称のことで、十二支では“子の刻”に相当します。

方位の見方も同様に、北を子として東・南・西に向け、時刻と同じに十二に区分されます。

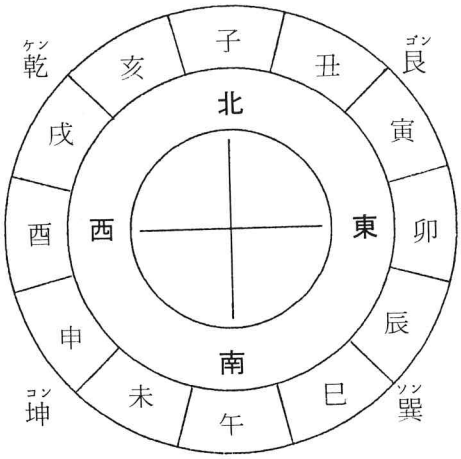


△ 時刻と十二支

※　近年では、1984年が「甲子」年に当たります。その前は、60を引いて1924年。

きのえね 甲子	きのとのうし 乙丑	ひのえとら 丙寅	ひのとのう 丁卯	つちのえたつ 戊辰	つちのとのみ 己巳	かのえうま 庚午	かのとのひつじ 辛未	みづのえさる 壬申	みづのとのとり 癸酉
きのえいぬ 甲戌	きのとのい 乙亥	ひのえね 丙子	ひのとのうし 丁丑	つちのえとら 戊寅	つちのとのう 己卯	かのえたつ 庚辰	かのとのみ 辛巳	みづのえうま 壬午	みづのとのひつじ 癸未
きのえさる 甲申	きのとのとり 乙酉	ひのえいぬ 丙戌	ひのとのい 丁亥	つちのえね 戊子	つちのとのうし 己丑	かのえとら 庚寅	かのとのう 辛卯	みづのえたつ 壬辰	みづのとのみ 癸巳
きのえうま 甲午	きのとのひつじ 乙未	ひのえさる 丙申	ひのとのとり 丁酉	つちのえいぬ 戊戌	つちのとのい 己亥	かのえね 庚子	かのとのうし 辛丑	みづのえとら 壬寅	みづのとのう 癸卯
きのえたつ 甲辰	きのとのみ 乙巳	ひのえうま 丙午	ひのとのひつじ 丁未	つちのえさる 戊申	つちのとのとり 己酉	かのえいぬ 庚戌	かのとのい 辛亥	みづのえね 壬子	みづのとのうし 癸丑
きのえとら 甲寅	きのとのう 乙卯	ひのえたつ 丙辰	ひのとのみ 丁巳	つちのえうま 戊午	つちのとのひつじ 己未	かのえさる 庚申	かのとのとり 辛酉	みづのえいぬ 壬戌	みづのとのい 癸亥

△ **干支順位表**（十干と十二支とを組み合わせた読みは、弟（と）に割り当たったものに限り、「の」でつないで読む。）



△ **方位と十二支**

＜十二支と動物名＞

十二支が暦、生年月日、時刻、方角などに割り当てられたのは、あくまで十二という数が基本となっています。一説では、十二支の文字は12箇月のそれぞれの月に特徴的な物事を表す文字であり、それぞれの文字には、季節を表す意味があるともいわれます。従って、元来十二支と動物とは関係はありませんでした。十二支が動物の名になったのは中国の戦国時代頃といわれ、一つには記憶しやすいために親しみやすい動物名とされたものと考えられます。また一説では、中国で十二宮のそれぞれに禽獣（きんじゅう）をあてたのに基づくとも言われます。

＜参考＞

十二宮　占星術で、太陽が一年間に運行する黄道を12分してそれぞれに当てた12の宮。獣帯を春分点を起点として十二等分し、各起点につけた名称。白羊宮・金牛宮・双児宮・巨蟹宮・獅子宮・処女宮・天秤宮・天蝎宮・人馬宮・磨羯宮・宝瓶宮・双魚宮の12の宮。

黄道　地球からみて太陽が地球を中心に運行するように見える天球上の大円。黄道が赤道と交わる点が春分点、秋分点である。

獣帯　黄道を中心にした幅16度の帯。主な惑星及び月・太陽はこの帯内を運動する。これらの天体の位置を指定するため、古代よりバビロニア、エジプト、インドにおいて獣帯を十二宮に等分した。

＜暦と俗信＞

暦は移り変わる季節（年月日）に対する「現在」を確認するために作り出されたものともいわれます。正確な暦があることによって、はじめて季節の循環を正しく予測することができるのです。人間がいろいろな行為を行おうとする時、過去・現在・未来の季節的な位置を正確に把握することは非常に大切な事で、その意味では、暦は生活の物差しともいえます。そのため、暦に取り入れられた将来を予測するいくつもの占術思想が、俗信として日常生活に浸透するのは容易であったといえるかもしれません。

江戸時代の暦を例にとると、暦には自然界の災難異変・人間界の吉凶・禍福等を記したいわゆる「暦注」が書かれています。今日の暦は、その日が1年のうちのいつかが一目でわかるように、むしろその事を優先させるように作られていますが、江戸時代の暦は1冊の本となっており、日付のところにその日の干支とともに様々な占いをもとにした注意書きが記入されていました。それが暦注といわれるもので、その日に行って良い事から悪い事まであらゆることに関する吉凶、災異等が事細かく記され、多かれ少なかれ人々の日常生活の行動基準となっていたのです。例えば、土用、十方暮、八専、血忌日、鬼宿、凶会日、二十八宿など多種多様なものがありました。

＜干支から何時何分へ＞

市内に残る古文書にみる年号を追ってみると、ずっと続けて記されていた「干支」による年の表示が、明治5年末から突然「明治5年」と記されていることに気付きます。以後、明治6年・7年……と明治という元号と数字とによって年が記されるようになっています。

この明治5年という年に何が起こったのでしょうか。

明治5年壬申11月9日、明治政府は律令時代以来千年以上も使われていた「太陰太陽暦」を廃止し、新たに「太陽暦」を使用することを布告（太政官の達第337号）したのです。この詔書によると、その年（壬申＝明治5年）を12月2日を以て終りとし、翌3日を明治6年1月1日とするとあり、さらに、1年を365日／12ケ月に分け、4年毎に1日の閏を置き、時辰儀時刻によって1日を24時間／午前・午後に分け、時刻は1時・2時……と呼び、……云々等の処置をとることが定められています。

これによって突然明治5年は「327日」で終わり、それまで使われてきた太陰太陽暦から、ほぼ現在の暦法へと変わったのです（時折耳にする「旧暦」というのは、この時まで利用されていた「太陰太陽暦」のことをいいます）。同時に、人々の生活に大きな影響を与えていた「暦注」も、年中行事や気候関係以外は消去され、千年以上も続いてきた陰陽五行思想に基づく種々の俗信や「干支」も次第に時代の波の中に消えて行く結果となったのです。

この明治政府が行った日常生活のタイムスケジュールの基本を根本から覆してしまうという突然の政治的断行の事についてはあまり知られてはいないようです。

太陰太陽暦から太陽暦へと暦法を突然変えたというその背景には、太陰太陽暦では、明治5年は閏年に当たる1年＝13箇月の年であり、その閏月の1箇月と12月の計2箇月を煙滅させることで、その分の政府予算（特に人件費）を節約してしまおうという、財政難に喘ぐ当時の新設政府指導者達の苦悩があったともいわれます。いずれにしてもこの明治政府の思い切った政策は、改めて「明治」という時代のエネルギーを感じさせる事件の一つといえます。

◎文化財に対するお問い合わせは
市役所　73－5111　内線343
社会教育課　文化財担当まで

＜編　集＞
東久留米市教育委員会社会教育課
〒203　東京都東久留米市幸町 3－11－10